ルカの福音書

―必要なことはただ一つ―

あなたはいろいろなことを思い煩って、
心を乱しています。
しかし、必要なことは一つだけです。

ルカの福音書 10章41-42節

聖書を読む会

目 次

さあ始めましょう ―手引の使い方― …… **v**

はじめに …… **1**

メシア（キリスト）と神の国 …… **2**

（1）アブラハムへの約束と「あわれみ〔慈しみ〕」 …… 2
（2）民の背（そむ）き …… 3
（3）捕囚（ほしゅう）と、捕囚後も続く異教徒による支配 …… 3
（4）メシア待望 …… 3
（5）メシア到来 …… 4

1 課　イエスの誕生と成長　1-2 章 …… **5**

A　ヨハネとイエスの誕生の告知　1 章 …… 5
B　イエスの誕生と成長　2 章 …… 14

2 課　公生涯の始まり　3:1-6:11 …… **22**

A　バプテスマの〔洗礼者〕ヨハネ　3:1-20 …… 22
B　イエスの受洗と系図　3:21-38 …… 26
C　悪魔に対する勝利　4:1-13 …… 28
D　ガリラヤ地方に戻って　4:14-44 …… 31
E　ガリラヤ湖畔で　5:1-16 …… 35
F　パリサイ人との初期の論争　5:17-6:11 …… 38

3 課　新しい神の民　6:12-10 章 …… **43**

A　新しい神の民とその生き方　6:12-49 …… 43
B　新しい神の民とこの時代の人々　7 章 …… 47
C　みことばの聞き方に注意せよ　8 章 …… 52
D　弟子の派遣と弟子への教え　9:1-9:50 …… 58

4 課　二つの道（エルサレムへの旅）9:51-18:43 …… 65
A　七十二人の派遣　9:51-10:24 …… 65
B　永遠のいのちを得るには　10:25-42 …… 69
C　神の国とそれを拒む者へのさばき　11章 …… 72
D　人の子によるさばきは近い　12章 …… 81
E　悔い改めなければ滅びる　13章 …… 87
F　二つの道　14章 …… 91
G　罪人の悔い改めを喜ぶ神　15章 …… 95
H　神と富とに仕えることはできない　16章 …… 98
I　弟子の心得とサマリア人の信仰　17章 …… 102
J　誰が神の国に入るのか　18章 …… 107
K　エルサレムに近づく　19:1-44 …… 112

5 課　エルサレムにて　19:45-22:38 …… 117
A　神殿での教え　19:45-21:38 …… 117
B　過越の食事　22:1-22:38 …… 126

6 課　イエスの逮捕から昇天　22:39-24:53 …… 130
A　イエスの逮捕と裁判　22:39-23:25 …… 130
B　イエスの死と埋葬　23:26-56 …… 134
C　イエスの復活、顕現（けんげん）、昇天　24章 …… 138

7 課　おわりに …… 142

年表 …… 146

さあ始めましょう ―手引の使い方―

この手引は、グループで聖書を読むために作られましたが、個人の学びや日々の祈りのためにも使うことができます。

グループで使う場合の指針

1. 司会者

グループの中で司会者を決めましょう。

司会者は聖書箇所を読み、あらかじめ、1. 質問、脚注、コラムや「まとめ」によって、その箇所の意味を理解し、2.「考えよう」で、どのようにみことばに応答するかを、ある程度、思い描いておくことが大切です。「祈り」までが一つのまとまりなので、そこまでは一人の司会者が担当するとよいでしょう。

司会者は聖書箇所について教えるのではなく、手引にそって質問し、参加者が自由に意見を述べ、話し合えるように励まします。また、どのような意見でもその是非を判断せず、分からないことや意見の相違を無理に解決しないで、そのまま先に進みましょう。

2. 参加者

実り豊かな学びのために予習をしておきましょう。お互いの意見を尊重し、考えたことを率直に分かち合います。他の人や別の本から学んだことを話すのではなく、該当する聖書箇所と手引に書かれていることから語り合いましょう。脱線したり、一人で長く話したりしないように気をつけます。

3. グループの状況に応じて

一回で進む範囲は、グループの状況や必要に応じて調節してください。「考えよう」の質問と「祈り」は、一つの例ですので、グループの状況に合わせてお使いください。

4. 解釈の違い

解釈の違いがある場合は、教会の指導者の立場を尊重してください。

5. より詳しく

手引の使い方や、各手引の特徴などについて詳しく知りたいかたは、ウェブサイト（https://syknet.jimdo.com）をご覧ください。

凡 例

〔　〕　この手引は「聖書 新改訳 2017」（以下、新改訳）に準拠しています。〔　〕は「聖書 聖書協会共同訳」（以下、共同訳）の表記で、新改訳と大きく違う場合に記しています。
聖書各巻の略語は、新改訳巻末の一覧に従っています。
例）イザヤ書 45 章 18 節 → イザ 45:18

地図で確認しましょう。新改訳〔共同訳〕聖書巻末の地図番号：パレスチナは 11〔9〕、エルサレムは 10〔10〕

年表　本手引の巻末にある年表で確認しましょう。

『　』　引用ではなく、要約、あるいは書名であることを示しています。

脚　注　上付き文字のある言葉は各ページの下（脚注）で解説しています（例：贖い[a]、脚[b]）。脚注にある聖書箇所は確認のためのもので、グループの学びでは開く必要はありません。

コラム　まとまった説明がされています。

コラムのテーマとページ

神の子（1）イスラエルの王	13
救い主	16
主	16
神の子（2）その神性	19
下着と上着	21
取税人〔徴税人〕と兵士	25
会堂	30
隠されたメシア	30
福音	30
神の国（1）神が王となる	34
神の国（2）ユダヤ人の期待とイエスの神の国	37
悪霊追い出しと病の癒やし	42
パリサイ人と律法学者	42
神の国の現在と未来	51
ユダヤ戦争	64
永遠のいのち	74
安息日とパリサイ人	80
たとえの解釈	101
よみ〔陰府〕と死後の苦しみ	103
エルサレム陥落（かんらく）	125
新しい契約	129
祭司長たちと最高法院	137

はじめに

福音書について

新約聖書の初めに収められている四つの福音書は、聖書全体の要（かなめ）となる書です。「旧約聖書が指し示してきたメシア（キリスト）はイエスである」と語るのが福音書であり、それを土台として書かれているのが『使徒の働き〔使徒言行録〕』やそれに続く手紙だからです。そこで、福音書に記されたイエスを知ることが、聖書全体を正しく理解するために大切なこととなります。また、キリスト者が日々の生活の中で仰ぎ見、祈りを献げ、従うのもこのイエスです。

イエスは、一人のユダヤ人として生まれ育ち、主（おも）に同胞のユダヤ人に対して語りました。ですから、イエスの教えとわざを理解するために、当時のユダヤ人の文化や宗教、政治と経済などに、できるだけ触れながら、ルカの福音書を読んでいきましょう。

著者ルカについて

『ルカによる福音書』の著者は、パウロの協力者でその宣教旅行にも同行した医師のルカであると言われています。ルカは『使徒の働き〔使徒言行録〕』も記したと考えられるので、両書は「ルカ文書」と言われ、バプテスマの〔洗礼者〕ヨハネの誕生から、パウロのローマでの宣教までの一貫したストーリーを語っています。

メシア（キリスト）と神の国

イエスの時代の「人々は キリスト〔メシア〕[a] を待ち望んでい」て（ルカ 3:15）、イエスがエルサレムに近づくと「神の国[b]がすぐに現れる」と思っていました（19:11）。

ルカの福音書を理解する上で大切なことの一つは、当時のユダヤ人が待ち望んでいた「メシア」、そしてメシアがもたらすと考えられていた「神の国」とは何かを知ることです。そして、そのためには、アブラハムの時代にまでさかのぼらなければなりません。

(1) アブラハムへの約束と「あわれみ〔慈しみ〕」

神は、ユダヤ人の先祖となるアブラハムをメソポタミアのウルから召し出しました。その時、神は

> アブラハムの子孫は数が増し
> カナンの地を所有し
> 世界を祝福するようになる

と約束しました（創12:1-7）。それから数百年後に、神はその約束（契約）に従って、エジプトで奴隷となっていたイスラエル人を様々な奇跡をもって導き出します（出2:23-25、3:15-17）。その後も、神はアブラハムとの契約を守って、繰り返し、民を守り導いてくださいました。このように、約束（契約）に忠実に、民を救い出す神の愛を「ヘセド」（ヘブル語）、あるいは、エレオス（ギリシア語）といい、それは、「あわれみ〔慈しみ〕」と訳されています。

---

a **メシア〔キリスト〕：**ヘブライ語の「メシア」（ギリシア語訳が「キリスト」）とは、旧約聖書の時代に、王や祭司、また、預言者が、油を注がれてその職に任じられたことに由来する言葉で、「油注がれた者」という意味であり、時代が経つにつれて将来現れるイスラエルの特別な王を指すようになった。

b **神の国：**神が王として治める世界の意味。

(2) 民の背（そむ）き

エジプトから出た後、神はシナイ山で律法を与えました。それはイスラエル人に神の民としてのふさわしい生き方を示すものでした。また、律法を守れば神の祝福があるが、律法を捨てて神に背くならばカナンの地から追い払われると警告しました。

ところが、イスラエル人は律法に従いませんでした。ダビデ王（前1000年頃）のように神を畏（おそ）れる指導者がいたときには、民は律法に従い豊かな祝福を受けましたが、多くの場合、預言者による悔い改めの呼びかけにもかかわらず、神に背き続けたのです。

(3) 捕囚（ほしゅう）と、捕囚後も続く異教徒による支配

ついに神はエルサレムを離れ、都はバビロニア軍によって陥落（かんらく）（前586年）。民の多くはバビロンに引かれていきました。捕囚となった人々の切なる願いは、故郷、カナンの地へ帰ることでした。

新バビロニア帝国がペルシア帝国によって滅ぼされると（前539年）、その願いがかなえられます。ペルシアは寛容な政策をとったため、ユダヤ人（イスラエル人）は、ペルシアの支配下にある故郷のユダヤ州に帰り、神殿、町、そして城壁を再建していきます。

しかし、それでもダビデやソロモンの時のような過去の栄光は戻りません。ペルシアの後はシリア、そしてローマという異教徒によって支配されていきます。それに加え、前37年以降、ローマの認可のもと、ヘロデがユダヤ地方を王として治め始めます。何重もの支配構造の下で貧富の差はますます広がり、ローマとその傀儡（かいらい）政権に対する民の反乱、また暴動も起こります。こうして、民族としての苦しみ、また貧しさは深まっていきました。

(4) メシア待望

そして、ユダヤ人は、「いつまで私たちは苦しまなければならないのか。異教徒の支配が終わらないのは、神の懲（こ）らしめがまだ続いている表れだ。律法を守らなかった罪が赦されていないからだ」と考えていました。

実は、それに先立つ数百年も前から、預言者たちは、次のように語っていました。

> 神はイスラエルの罪を赦し、エルサレムに戻ってくださる。
> 捕囚を終わらせ、王であるメシアをダビデの子孫から立ててイスラエルを再興(さいこう)してくださる。そのメシアは、イスラエルだけでなく全世界をも正義によって治める王の王となる。[a]

旧約聖書にこのようなメシア預言があったため、ユダヤ人は次のような望みを持つようになりました。

> 律法を守れば、神はイスラエルの罪を赦し、エルサレムとその神殿に戻って来てくださる。その時、神はダビデの子孫を王、メシアとして立て、敵である異教徒ローマの支配を武力で打ち破り、イスラエルを再興(さいこう)してくださる。それが、「神の国」である。[b]

(5) メシア到来

アブラハムへの約束に忠実な神は、苦しむ民をあわれみ〔慈しみ〕、ついに、ダビデの子孫の一人をメシアとして立ててユダヤに遣わされました。

果たして、この真(まこと)のメシアは、ユダヤ人が期待していた通りの神の国をもたらすのでしょうか。神はどのように、このメシアによってアブラハムへの約束を守り、旧約聖書のメシア預言を成就するのでしょう。ルカが記した福音書を読むと、この疑問への答えが明らかになっていきます。

a イザヤ書などの預言書や、詩篇79、80篇など。

b ユダヤ人の中には、いろいろなグループがあった。律法を守ることによってメシアの到来を早めようとするパリサイ派、異教徒の支配に対し武器をもって抵抗しようとする熱心党、逆にその支配に甘んじて、現状を保とうとするサドカイ派、荒野に退いて厳しく律法を守り、メシアの到来を待つエッセネ派など。しかし、総じてユダヤ人は、上記のように信じていた。

1課　イエスの誕生と成長　1-2章

A　ヨハネとイエスの誕生の告知　1章

a ルカの福音書について　1:1-4

多くの人がまとめて書き上げようとしている「成し遂げられた〔実現した〕事柄」とは、福音書に記されているイエスの生涯です。

1　ルカはどのような情報を基に、また誰のためにこの福音書を書いたのですか（1:1-4）。脚[a]

2　目撃者の証言はどれほど信頼できるでしょうか。

まとめ

イエスの言動は、目撃者が伝えたことに基づいて記録されていきました。医者であるルカはその資料を綿密に調査し、順序立てて執筆しました。それは、テオフィロが、自分の受けた教えが確かであることを理解するためでした。

b ヨハネ誕生の告知　1:5-25

ルカが順序立てて書いた最初の出来事は、バプテスマの〔洗礼者〕ヨハネ誕生の告知でした。

1　ザカリヤ〔ザカリア〕とエリサベツ〔エリサベト〕はどのような

a **テオフィロ：**この人物が誰であるかは不明だが、キリスト者となった高位のギリシア人と思われる。「使徒の働き〔使徒言行録〕」も、「ルカの福音書」の後半として、テオフィロに献呈されている（使1:1-2）。
教え：テオフィロが、使徒やその後継者たちから受けていた教え。

人ですか（1:5-7）。脚[a] 年表

2 ユダヤ人は、「神に従う者は祝福され、長寿と多くの子孫に恵まれる」と教えられていました。命令と掟〔戒めと定め〕を落ち度なく行っていたにもかかわらず、子どものいない二人はどのように感じていたと思いますか。

3 ザカリヤが神殿で香をたいていたとき、何が起きましたか（1:8-13）。

4 ヨハネはどのような人となり、何を成し遂げるのでしょうか（1:14-17）。脚[b]

5 ザカリヤは御使いのことばにどのように答えましたか。その結果どうなりましたか（1:18-23）。

6 御使いのことばは実現しました。それはエリサベツにとって、どのようなことを意味したでしょうか（1:24-25）。

---

a **ヘロデ：**ヘロデ家は、異邦人のイドマヤ人（エドム人）であったが、ハスモン朝時代（紀元前140-37年頃）の前半にユダヤによってユダヤ教に改宗させられていた。紀元前37年、ローマ帝国がその支配を東方に広げる中、ヘロデは、ローマ帝国への従順を誓って、ユダヤ地方を王として治めることが認められた。
アビヤの組：アロンの子孫で、神殿に使える第八の組の長（I歴24:10）。

b **ぶどう酒や強い酒〔麦の酒〕：**神に献げられたナジル人は、ぶどう酒や強い酒〔麦の酒〕を飲まなかった（民6:1-4）。
エリヤの霊と力：世の終わりに、神ご自身がイスラエルの救いとさばきのために来られる。その前に、預言者エリヤが遣わされ、人々を悔い改めに導き、神が来られる備えをすると預言されていた（マラ3:1、4:4-6〔3:22-24〕）。
父たちの心を子どもたちに：家族間の和解と一致を指す（マラ4:6〔3:24〕）。

まとめ

「神ご自身がまもなく、ご自分の民の救いのために来ようとしている。それに先立って、民を悔い改めさせて整える働きをするヨハネが、エリサベツから生まれようとしている」というのが、御使いの知らせでした。

この知らせは、ユダヤ民族が500年以上もの長きにわたって待ち望んできた喜びの知らせでした。また、ザカリヤとエリサベツにとっては、恥が取り除かれるというよい知らせでもありました。

考えよう

身ごもったエリサベツの反応を見ると、「民族の救いにかかわる事が自分の身を通して始まる」という出来事の重大さには思いが至っていないように見えます。あなたがエリサベツの立場にあったならば、どのように応答していたと思いますか。

祈り

神よ、私たちもこのよい知らせの重大さを理解できるように助けてください。また、あなたは一人の人の悩みや恥も取り除いてくださる、あわれみ深い方であることを感謝します。

c イエス誕生の告知　1:26-38

御使い〔天使〕ガブリエルはザカリヤに現れて、主がイスラエルに来られるという良い知らせを伝えましたが（1:17-19）、ザカリヤは信じることができませんでした。しかし、妻エリサベツは御使いの言うとおりに身ごもりました。

1 ガブリエルは、次にいつ、誰のところに遣わされましたか（1:26-27）。ダビデの家系〔ダビデ家〕[a]

2 ガブリエルは、マリアが「恵みを受けた〔いただいた〕」と語ります。それはどのような恵みでしょう（1:28-33）。脚[b]

3 数百年も待ち望んでいたメシア（キリスト）が、処女である自分から生まれると聞いたマリアはどう応答しましたか（1:34）。あなたならなら、どうしたでしょう。

4 御使いは、当惑するマリアを諭（さと）すために、どのような点を挙げていますか（1:35-37）。p.13 コラム「神の子（1）イスラエルの王」参照。

5 御使いの言葉に対し、マリアはどう応えましたか。マリアは自分のことをどのような者と見ているでしょう（1:38）。

---

a **ダビデの家系：**イスラエルと世界を治める特別な王、すなわち、来るべきメシアはダビデ王の子孫とされていた（IIサム7:4-17）。

b **いと高き方の子：**神の子、すなわち王を意味する。p.13 コラム「神の子（1）イスラエルの王」参照。
とこしえに…終わりはありません：メシアである王の支配はとこしえに続くと約束されていた（IIサム7:12-13、ダニ2:44、7:13-14、18、27）。

まとめ

イエスが旧約聖書で告げられていたメシアであることを、御使いは様々な言葉を用いて強調しています。マリアは、『イスラエルを永遠に治める王メシアが、処女である自分から生まれることになる』と御使いから聞いて当惑しました。しかし、御使いの言葉によって、その知らせを受け入れました。そこには、主に従うはしため〔仕え女〕としての自覚と信仰が見られます。

考えよう

当時、未婚の女性が妊娠することは恥であるだけではなく、罰を伴う可能性がありました。自分に対するそのような神のご計画を受け入れるマリアの心の歩みを思い巡らしてみましょう。あなたなら、どうしたことでしょう。

祈り

神である主よ、メシア誕生の良い知らせをありがとうございます。マリアは戸惑いながらも、処女である自分からメシアが生まれることを受け入れました。

当惑するような神のみことばにも、神のしもべとして従う信仰を私たちにもお与えください。

d マリアの賛歌　1:39-56

マリアは、ユダの町に住む親類のエリサベツを訪ねました（1:39-40）。

1　エリサベツは、ヨハネをみごもった時には、自分の恥が取り除かれたことに注意が向けられていました（1:24-25）。この時は何に思いを向けていますか（1:41-45）。

1:46-55に記されたマリアの歌は、後の時代になって「マリアの賛歌」（マニフィカト）と呼ばれるようになりました。ユダヤ人が親しんでいたハンナの祈り（Iサム2:1-10）を基本に、様々な旧約聖書の言葉が織り交ぜられています。マリアは、1:34では、処女である自分が出産することに注意が向けられていましたが、この時は、どのようなことに思いを馳せているか見ていきましょう。

2　マリアが主をたたえているのはなぜですか（1:46-48a）。また、人々がマリアを幸いな者と呼ぶのはどうしてでしょうか（1:48b-49a）。それは、何を指していると思いますか。1:31-33を思い出しましょう。p.16コラム「救い主」参照。

3　マリアは、1:49b-55で、主がなしてくださった過去のみわざを思い出しています。その箇所は主の「あわれみ〔慈しみ〕」という言葉にはさまれて記されています（1:50と1:54-55）。この「あわれみ」はどのような意味でしたか。p.2の「アブラハムへの約束と『あわれみ〔慈しみ〕』」を読んで確認しましょう。

4　主のあわれみ〔慈しみ〕によって、二種類の人々の立場が逆転しています。それはどのような種類の人々ですか。出エジプトの時には、具体的には誰を指したと思いますか。

5　マリアは、「主のあわれみ〔慈しみ〕は、代々にわたって　主を恐れる者に及」ぶ（1:50）、つまり、マリアの時代にも及ぶと考えています。一世紀のユダヤ人であるマリアにとって、立場が逆転する二種類の人々とは、誰を指すのでしょう。自分の胎内に宿るメシアは、何をしてくださると考えていたと思いますか。p.3-4の（3）と（4）を読んで考えてみましょう。

まとめ

主は、あわれみ〔慈しみ〕のゆえに、アブラハムへの約束を忠実に守り、イスラエルの先祖を、エジプトをはじめ様々な異教徒の支配から救い出された方です。主は、高ぶる権力者を引き降ろし、虐（しいた）げられていた主のしもべを高くしてくださいました。マリアはそのことを思い起こし、同じ主が、今、異教徒の支配の下で苦しんでいるイスラエルを助けてくださることを期待しています。しかも、それは、自分の胎内に宿る子を通してでした。

考えよう

1　私たちが通常使う「あわれみ〔慈しみ〕」の意味と、聖書の意味の違いは何でしょうか。語り合ってみましょう。
2　若いマリアが旧約聖書に基づく歌を詠（よ）んだことから、当時のユダヤの女性たちがどのように聖書に親しんでいたのか想像しましょう。

祈り

あわれみの主よ、あなたはアブラハムへの約束に忠実な方です。イスラエルをエジプトなどから救い出しただけでなく、主を恐れるマリアの同胞にも、そのあわれみ〔慈しみ〕を注いでくださいますから、感謝いたします。